特集

京都地域資料のアーカイブ構築

田　中　　聡
（立命館大学）

田中です。よろしくお願いいたします。

私は今日、「京都地域資料のアーカイブ構築」というテーマでお話させていただきます。今回のシンポジウムのテーマは「マイノリティ・アーカイブズ」ですが、私の取り上げているものは直接的にそれに当たるものではないということは最初にちょっとお断りしておきます。ただ、私が調査している中でそれに該当するものが含まれた資料もいくつか見つかりつつあって、広く考えた時に何か私たちの経験が役立かもしれないということで、話題提供させていただきます。

お手元の資料はパワーポイントのシートと同じもので、随時見ていただきながら進めたいと思います（以下、p①、②…は本稿末に挙げたpptのシートナンバーを指す）。

現在私は文学部の京都学専攻という、ちょっと変わった名前の専攻に所属しています。地理学とか観光学の先生方と一緒の地域研究学域に入っており、地域に出て活躍する有用な人材を育てたいというのが我々の専攻の一番重要な目的です。「どういう人が地域にとって有用な存在なのか？」と考えた時に、その地域の文化や、多様な住民がこれまで辿って来た歴史を知って、それを研究して広く伝えていく人材が育ってくるというのが、今の世の中にとってとても大事なんじゃないかと思うんですね。

そういう目で京都の実態を見た時、現状の住民の生活が分かるような資料は、本当に貴重なものが大変多いわけです。今回紹介する3種類は、いずれも我々が関わらなかったら消える運命にあった資料ばかりです。要するにその価値付けができないままに地域に偶然残って来たものです。誰かが「それは価値がある」ということをはっきり言わない限り、無くなってしまうものなんですね。今回私が入れて頂いたセクションに即して言えば、まさに地域に根ざした資料を「つかう・いかす」に関わることをやりたいと思って調査をし、アーカイブを作ることを進めようとしているわけです。

p②「京都地域資料の収集と活用」をご覧下さい。「京都地域、京都府の周辺を含む地域において、地域住民が地域社会・文化の来歴や現状について『自ら語った』資料、多彩な資料を広範に収集し、データベースを作成し蓄積する。それを公開することで、地域に根ざした研究や文化振興に寄与する」というのが最終的な目標でありますけれども、そう簡単にいくものではないんですね。それで、これまでどういうものを資料として我々は見てきたかですが、大学での授業や科研等に関わりながら調査を行い、収集・整理してきました。

今日はそのうち三つを紹介します。まず「竹松家資料」（p③～⑨）は、個人の半世紀にわたる新聞のスクラップ集です。「こんなものが資料になるのか？」っていう考え方は当然できるわけですけれども、少し話を進めると、価値がお分かりいただけるんではないかと思います。

二つ目は「吉見敏夫氏の旧蔵資料」です（p⑩～⑯）。京都市立小学校の教員だった方の資料ということになるわけなんですけれども、これも偶然手に入れたものです。

三つ目が京都の教職員組合の所蔵資料（p⑰～⑲）、これは2万点ぐらいあります。併せて京丹後市峰山に本部がある奥丹後地方教職員組合の所蔵資料も継続的に調査・研究しています。教職員組合は事務所を持っておりまして、その倉庫に資料が蓄積していくわけですけれども、管理する人がほとんどいない状態がずっと続いています。結局整理されないまま、奥丹後地方教職員組合のほうは事務所の移転という問題とぶつかって、結局その資料がどこに行くか分からないという危機的な状態になりました。そこで研究グループを組織し、現状の調査と目録の作成を行った上で、京丹後市に移管しました。

その他、今回は時間の都合で充分紹介できませんが、京都民科歴史部会という、創設以来70年の歴史がある学会の所蔵資料の整理と目録の作成を行ったり、立命館大学の日本史学研究室が所蔵している資料もあります。後者の中で特に面白いのは敗戦直後から半世紀にわたって続けられてきた「夏期日本史公開講座」という市民向け連続講座の資料です。もしかしたら立命関係の方は覚えておられるかもしれません。夏休み中に学生が企画をして1週間、日本史の各時代の研究者を呼んで公開講演会をする企画を1950年代から90年代まで続けていた、まあ

稀有な大学だったんですね。他にそんなことをやっている大学はたぶんないと思います。その記録がほぼまるまる残っています。これも調査の対象になりました。

そして、京都市在住の80歳から90歳代の高齢の方の戦争体験や、占領期の生活の聞き取りを京都学専攻の学生や本学国際平和ミュージアムの学芸員とともにやっております。

これらは、一見するとほとんど共通点がないものだというふうに言えると思いますけれども、実は京都という場所の地域的な特性にすごく関わった資料群ではないかと私は思っているんですね。これから事例を見ていただきながら、考えてみたいと思います。

まず（1）竹松家資料のデータベース作成について。竹松家資料とは、立命館大学の地理学科出身の高校の先生、長く大将軍地区に住んで居られた竹松定雄さんが、半世紀にわたって膨大な新聞の切り抜きを独力でスクラップされたものです。実際の写真を見ていただきましょうか（p⑤）。今、新聞資料の管理っていうのはすごく大きい問題になってると思うんですね。特に、現代の資料を集める機関においては量が多すぎて対応できないところが多いと思います。この資料のすごくユニークなところは、一人の方が5、6紙ぐらいの新聞（全国紙や地方紙）を読んで、京都関係の記事を切り抜いて、全部同じ大きさの台紙に貼って、一定数に達したら製本するという地道な作業をずっと半世紀続けてきた資料だということです。こんなものは他では見たことがないですね。しかも面白いのは、京都市だったら右京区分だけで10何冊、北区分だけで20何冊という形で、区ごとに全部それを分けて整理することをやっています。これはもう、明らかに一つの分類の思想に基づいた資料の整理の仕方ではないかな、と思うんですね。

この資料には、竹松さんの地域調査の記録とか、旅行先の写真アルバムとか、色んな記録も含まれます。2012年に我々が専攻の学生と一緒に調査をして引き取ってきて、件名目録を作ることを進めました。最初見た時、あまりの量の多さに驚いたんです。専攻の共同研究室に搬入した際（p④）、「何だこれは？」と思いましたが、収集者である竹松さんの視点から、地域ごとに記事が分類されていて、歴史・考古・民俗・食・伝統・伝承などテーマごとに分けてそれを見ることができる点が重要だと感じました。長期連載のシリーズはそれだけで1冊にまとめるというように、非常に丁寧な残し方をされています。竹松さんは長らく高校社会科の先生でしたから、「授業で使おう」という意図もあってこういう整理の仕方をされたと思いますが、ご本人も奥様も亡くなった今は、どういう意図で収集・整理されたか直接伺うことはもう叶いません。

現在、京都学専攻の共同研究室の書架4つ分に、本のようにして立てて並べることができるような形で製本された竹松家資料が置かれています。「京都地域に関して、半世紀もの長期にわたり、複数の新聞記事を収集・分類した一地域住民の手による一種の『京都百科』だ」というふうに私たちは評価しました（p⑤）。ほかに類例がなく、画像データが非常に豊富に含まれていることからも、価値が高い。京都の街並みが戦後どのように変わっていったかを知ることが出来る情報がたくさん含まれています。こういったものが京都学専攻の授業、あるいは研究論文などでも利用される形で、徐々に活用され始めていますけれども、残念ながらまだ一般的に公開できてはおりません。その原因は、第一に整理が追いつかない、ということです。「手が足りない」。これはアーカイブの抱える大きな問題だと思います。

データベースの作成の手法は二通りで、一つは資料目録を作ります（p⑥～）。冊・ページ単位で記事に通し番号を振り、大小の見出しと写真の有無、写真キャプションを記録します。例えば古墳の発掘の時の記事が連日、切り抜いて並べられている場合（p⑨）、掲載される写真からどんな風景が当時発掘現場の周辺にあったのかということも確認することができるわけです。学生や院生がアルバイトという形で、この目録作りを継続的にやっておりますけれども、それによってその学生や院生も、例えばその地域のさまざまな情報について、自分なりにアクセスすることが可能になる。教育的な意味も少なからずあるのかなと思っています。

データベース作成の二つ目の手法は画像スキャンです（p⑧）。本学のアートリサーチセンターに協力していただいて、各ページをスキャンして精細な画像を作り、PDFのデータを作ります。それによって、例えばp⑧の四角い枠で囲まれているところに、例えば「町衆」だとか「古墳」だとか「太秦」だとか語句や地名が出てきた場合、それを画像検索で探すことができます。ただこれはあくまで画像化したデータの、データベース化の作業であり、やはり資料目録のほうで各記事の見出しや画像情報などの詳しいデータがあって初めて、両方併せて検索が可能になります。そうした形で二つの作業を進めていく必要が出てきています。立命のARCやデジタルアーカイブ研究所に協力を依頼して、こういったものを1枚1枚確認しつつ、撮影も進めているところです。これが一つ目の資

料紹介になります。

次は(2)吉見敏夫さんの旧蔵資料の目録化です(p⑩)。京都市の市立小学校の教員をされていた吉見さんが所蔵していたと思われる、戦後京都の教育に関する資料群で、全96点確認しています。この資料はたまたま古書市で私が手に入れたもので、全部を無造作に丸めてビニール紐でくくられた状態で売られていました(笑)。要するに保管する意図があまりないものだったんです。物資不足だった戦後すぐの時期からの藁半紙のプリント等が多く、ボロボロ・ザラザラの紙質のものがたくさん含まれており、多くはガリ版刷りで、要するに「それを価値があると見るか見ないか」っていうことで言えば、見られないのが普通ではないか、そういう資料群でした。

でもこれを調べていくと、他にはなかなかないものが多く含まれていることが分かりました。例えば、ラジオ劇のシナリオ集と放送の予定表(p⑫)です。京都市では戦後に社会科や国語科の教育などに使う目的で、吉見さんも含め現役の小学校の先生たちが脚本を書き、小学校4･5年生が登場人物を演じ、NHKで15分番組として放送するラジオ劇があったということを、私はこの資料を見て初めて知りました。実はこういうものは記録が殆ど残っていません。たまたまこういう資料が古書として売りに出されたので見つかった次第です。吉見さんを初めとする戦後京都の教員の研究活動やラジオ劇運営の実態などについては、もと市立小学校長の林弘子氏の聴き取り調査も行いました(p⑬)。

このシナリオの内容を1個1個見ていくと大変面白いんです。例えば、p⑫の左側に映っているのは京都の扇子職人の家に行って伝統工芸の現状について聞き取りをするストーリーになっています。京都の伝統文化であるとか、歴史であるとか、社会の変容といったものが、現役の教員によってストーリー仕立てにされて、それを子どもたちが実際に演じて、子どもたちが観るっていうことをやっている。まさに京都の独特な教育のあり方だと思いますが、同時に地域の住民がどんなふうに京都を見ていたか、現状を考えていたかをよく表す資料になるのではないか、と思うわけです。

この資料に関しても、(1)同様に目録を作る作業を進めました。全部で96点なので割に早く整理できたんですけれども、その中に例えばこういった資料があります。一つは敗戦直後の京都の社会の実態を表す資料として挙げられるもので、『昭和二十三年末 少年警察の活動実績』です(p⑮)。1948年当時、まだ京都市警察の時代に集積された少年犯罪のデータをまとめた記録集です。こういうものは京都府立京都学・歴彩館などには所蔵されていないかと思ったのですが、どうも入っていない様で、これは非常にレアな資料だと思われるんですが、生々しい情報がたくさん出てきます。どういう犯罪で、何歳ぐらいの子どもがどんな罪を犯し、どういう処分を受けたのか。その児童たちの家庭環境がどうなっていたのか、というような統計グラフなどです。こういうものを見ると、戦後の早い時期、1948、9年という時代に、京都においてもいわゆる浮浪児、親から離れて生活をするような子どもがたくさんいたということなど、色々な情報をこういった資料の中から読み取ることができます。

もう一つ、面白かったのは、「民主主義の歌」の楽譜です(p⑯)。「代議士さんは民主主義」というすごいタイトルで(笑)、今の政治家に聞かせたいようなそういう曲です。これは資料群の中で一番古い資料で、1946年に色刷りで印刷され、広く配られていたことは興味深いです。作者の出雲路よしかず(敬和)さんは戦後京都で活躍する歴史や京都文化の著名な研究家で、その方の若い頃の作品だと分かります。貴重な資料だという目で見なければ、おそらく歴史を語る資料としては扱えなかったものが、まだ地域に沢山埋もれていることを実感できます。

もう発表時間がだいぶ来ていますので、(3)の資料紹介を急ぎます。私と共に研究をしていたグループ(戦後歴史学ワーキンググループ)が、京都の地域資料を集めだしたのは2005年頃からで、その時の私たちの関心は「国民的歴史学運動」と呼ばれる文化運動の痕跡を探すことにありました。若手の研究者と一般の地域住民とが一緒に地域の歴史を書こうという運動です。1952年前後に急激に盛り上がり、すぐに終わっていく中で、どんなふうにそれが地域社会の中に影響を残したのかということを知る目的で、色々な資料群を探す中、京都教職員組合と奥丹後地方教職員組合の所蔵資料の存在を知り、調査しました。そこで数万点に及ぶ膨大な資料がほぼ未整理の状態で放置されていることを知り、資料目録作りに取りかかった訳です。どんな資料があるのかについては、例えばp⑱の目録を見ていただくと分かっていただけるかと思います。右側に載っているのは、1953年に起こった「旭丘中学事件」、京都の戦後教育史において重大な事件ですが、それに関わって処分された教員関係の資料が京教組資料の中にまとまって入っています。旭丘中学校の当時の学級日誌であるとか、あるいは当事者の裁判記録であるとか、そういったものが、膨大に含まれます。

戦後京都の教育をめぐる行政と教職員組合との政治対立が、この資料の背景にあります。この貴重な資料群が

ほとんど活用されぬまま眠ってきたのは、やっぱりそういう政治情勢が影響していることを考えざるを得ませんでした。しかも教育史という枠組みだけで研究されてきたので、地域社会の基礎資料という面は全く評価されずに今に至っています。当時を知る元教職員は高齢化し、次々亡くなっていくので、戦中・戦後の京都地域の教育や生活の貴重な記録が失われつつあるという状況は、いま既に、また今後さらに深刻な問題となってくるだろうと思います。

旭丘中学事件で処分される３人の教員は当時から「アカ」という言い方で呼ばれ、教育現場から排除されました。これが裁判沙汰になり、さらに子どもたちの分別授業が展開されたことで、京都戦後の教育における政治対立を表す典型的な事件だと理解されています。現在でも「保守的な教育政策」対「革新的教育運動」というような単純な図式で整理されることが非常に多い事件だと言えます。しかしながら興味深いのは、この資料群の中には、地域住民の構成の差だとか、当時どんな雰囲気の中に生徒や教員たちが置かれていたのかを示す素材がたくさん含まれていることです。一例を挙げます。生徒会の会報は我々の作った目録にも入っていますが、会報を集めた『入道雲』という本が後になって刊行されました（p⑲）。その中には例えば若手教員と西陣織の工場で働く労働者との座談会の記録が出ており、父兄の「生活がたたなくて、子どもたちが勉強できない」といったリアルな声も収録されています。あるいは「1945年の８月15日に何をしていたか」というアンケートがあったり、1950年代の住民の地域社会への視線や歴史意識などを読み取りうるような記事が数多く含まれていて、現在から見ればこれらも一種の「地誌」という形で評価することも充分可能ではないかと思います。

今日申し上げたことを簡単にまとめます（p⑳）。竹松家資料のデータベースに関しては、主に卒業論文の作成等においてもう既に役に立ちつつあります。今後は目録と画像データを完成して、デジタルアーカイブとしての公開を目指します。現在調査中の他の資料に関しても、順に整理しながらデータベースを作成していくことで、地域資料の総合的なアーカイブとしての価値を新たに生み出していこうと考えております。

残念ながら研究が遅れていると言わざるをえない、京都地域資料の情報取集や調査・整理を進め、その成果をほかの研究機関とも共有しながら、地域の一般住民や学生、研究者、教育者に広くフィードバックする仕組みを作っていきたいと思っています。今一番必要なのは、たぶんその情報共有の仕組みを作ることではないか、そう考える次第です。

最後ちょっと駆け足になりましたけれども、私の話題提供はこのぐらいで終わります。

どうもありがとうございました。

京都地域資料のアーカイブ構築

文学部 地域研究学域 京都学専攻　田中　聡

①

京都地域資料の収集と活用

研究の目的

京都地域（京都府周辺を含む）において、地域住民が地域社会・文化の来歴や現状について「自ら語った」多彩な資料を広範に収集し、データベースを作成・蓄積。地域に根ざした研究や文化振興に寄与する。

主な成果（科研・立命人文研・平和ミュージアム科研・京福電鉄のプロジェクト等活用）

・竹松家資料（個人の半世紀にわたる新聞スクラップ集）のデータベース作成　…（１）

・吉見敏夫氏旧蔵資料（京都市立小学校教員）の調査・目録作成　…（２）

・京都教職員組合所蔵資料（約2万点）、奥丹後地方教職員組合所蔵資料（約3万点）の調査と目録作成、京都民科歴史部会所蔵資料（522件）の整理と目録作成　…（３）

・立命館大学日本史学研究室所蔵資料(約3000件）の整理と目録作成

・京都市内住民の戦争体験・占領期生活の聴き取り（80～90歳代5名）　　その他

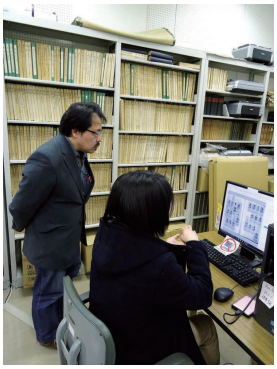
②

(1)「竹松家資料」のデータベース作成

- 立命館大学旧制地理学科出身の元高等学校教員・竹松定雄氏（1925-2004年。大将軍地区在住）が半世紀にわたり収集・作成した新聞記事のスクラップ帳約300冊を中心に、地域調査の記録、社会科授業関係資料、写真アルバムなどを含む。2012年、田中と三枝暁子氏のゼミで竹松家を訪問、京都学専攻への寄贈を受けた。通し番号を振り、共同研究室内に配置（閲覧可）。
- 以後、新聞記事に関する目録の作成をゼミ生と大学院生（日本史学・文化情報学・先端研等）が順次進め、現在までに100冊ほど目録が完成している。
- 併行してカラーの精細な画像データも作成中。

③

共研に資料を搬入（ 2012年8月6日）
分類して番号順に並べ、書架に配置。



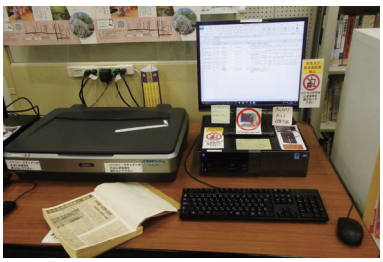
④

「竹松家資料」新聞データベースの価値

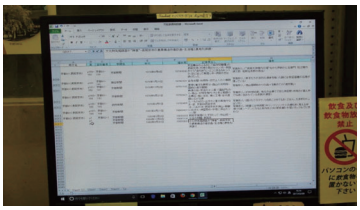
- 高校教員で歴史地理の研究者だった竹松氏が、『京都新聞』『朝日新聞』『読売新聞』『毎日新聞』『神戸新聞』『京都民報』等の各紙から集めた京都関係記事を、地域（府・市区別）と歴史・考古や民俗・食・芸能・伝承等テーマ別にグルーピングし、長期連載のシリーズはそれぞれ一巻を設ける（書籍化されていない特集も多い）。各巻ごとにほぼ編年的に記事を配列し、B5版の台紙に貼り付けて綴じ、同型の冊子体に製本。
- 京都地域に関して、半世紀もの長期にわたり、複数の新聞記事を収集・分類した一地域住民の手による一種の「京都百科」。他に類例なく、京都に関するイメージの推移や地域社会の変化を考察する上でも価値が高い。画像データも豊富に含まれる。
- 京都学専攻の授業や研究論文でも紹介し、ここ数年でこれを活用した研究が進みつつある。

⑤

データベースの作成①資料目録の作成



- 各巻ごとに記事に連番を振り、見出し、年月日、出典、添付写真・図表のキャプションを読み取り、目録を作成する。



⑥

資料目録の一例（京都71（西京区１））

件子名	頁	資料番号	新聞名	年代	掲年月	記事見出し	備考
京都71(西京区1)	pp1,2	京都71-1	不明	1966年10月25日	19661025	「日本の年輪」桂離宮 原開と修復の美妙な交響楽	
京都71(西京区1)	pp3,4	京都71-2	不明	1966年2月4日	19660204	「東の文学地図(鉄道(1))」(松島雪 野上豊一郎「尊政集」 "日本の心"そのもの	p3に桂離宮周辺の地図、p4に桂離宮の写真あり(「長谷につづく(歌碑、松と野子の白さが目に浮かびただ」)
京都71(西京区1)	pp5,6	京都71-3	不明	○年2月16日	****0216	「低温ここに」 山里の珍味で"長"、恋慕し"祖の恋し"、「幸せ鍋の会(編)」	p5に桂周辺の地図、p6に2枚の写真あり(「長谷研究会の人たちが所蔵した"祖の恋し"」、「幸せ(ふ)の会編で作るありがさす 千夕鍋のお皆さ(う)」
京都71(西京区1)	p7	京都71-4	京都新聞	1972年8月12日	19720812	「水(28)」 松尾山の滝	p7に松尾山麓辺の地図あり
京都71(西京区1)	p8	京都71-5	京都新聞	1972年8月1日	19720801	「季節を歩く」(版)(2)(3)(春)	p8に善峰寺周辺の地図(・写真あり(「善峰の庭園は、やはり名所中の無双の一」)
京都71(西京区1)	p11	京都71-6	不明	1968年1月17日	19680117	「ふるさと民歌(12)」川島・三宮神社の御祭 絵馬奉納	p11に三宮神社周辺の地図と絵馬奉納風景の写真あり
京都71(西京区1)	p13	京都71-7	京都新聞	1968年6月6日	19680606	嵯峨の霊山に見事な"古墳群"大学生の考古学グループが発見 国指定完全な形で44基 学術「発掘ニュース」を計画	p13に2枚の写真あり(「西墓群が見出された三十の墓山」「石室が露出した現しいる墓」
京都71(西京区1)	p15	京都71-8	不明	1967年2月12日	19670212	「京の夜(10)」洛のいのち 西芳寺	p15に写真あり(「おい一 阪急京都駅から徒歩バス西寺行き」)
京都71(西京区1)	p17	京都71-9	不明	○年11月10日	****1110	「遺跡のめざめ(ゆく)」完全な姿で保存 開墓構造明した石棺 一京の墓	p17に宮本町辺の開墓記を実測(17年間)先の石棺が(に)埋められていた未発掘墓
京都71(西京区1)	p19	京都71-10	京都新聞	1974年9月26日	19740926	中央図書100年の歩望 名所区の茶嶋堂 岸左段合資料館へ市文書寄贈 問一家族では異例 地図時代に登之のぼす	p19に2枚の写真あり(「茶嶋堂に伝わる古文書」「岸左段合資料館に寄贈された嶋茶の巨文書群」
京都71(西京区1)	p21	京都71-11	京都新聞	1970年7月24日	19700724	「風史"探訪ホットな町に 嵯峨ニュータウン 考古調査地めぐる 古墳時期様も検出へ	p21に写真あり(「伝説古墳"を調査する調査・学大教授らの構究グループ」)
京都71(西京区1)	p22	京都71-12	京都新聞	1970年3月2日	19700302	横穴式石室を発掘 洛西ニュータウン造成地の調査	p22に写真あり(「発掘された古墳の横穴式石室」)

⑦

データベースの作成②画像のスキャン

- ARCのスキャナーで各ページをスキャンし、pdfデータを作成。これにより、記事中の特定語句・地名等（ex.「町衆」「古墳」「太秦」…）の検索が可能に。
- （１）の資料目録と併せて用いることで、見出しと使用語句の両方から関心のある記事や写真等を探すことが出来る。

⑧

データベースの作成③精細な画像の作成

特定非営利法人デジタルアーカイブ研究所に協力を依頼し進めている。

⑨

(2)吉見敏夫氏旧蔵資料の目録化

- 京都市立小学校教諭・吉見敏夫氏が所蔵したと思われる、戦後京都の教育に関する資料群。全９６点（1946～66年）。
- ＮＨＫ京都・大阪放送局が1950～60年代にかけて行っていた小学3～5年生の社会科向け番組「学校放送　京都府の時間」（ラジオ劇）のシナリオや放送予定表等が資料群の主体。
- 京都児童文化研究会の会誌『もくば』等、教員の研究活動がわかる刊行物の古いバックナンバーも含まれる。
- 敗戦直後に警察から配付されたと思われる少年犯罪の統計資料、民主的な国政選挙を題材とした歌の楽譜など、珍しいものも。

⑩

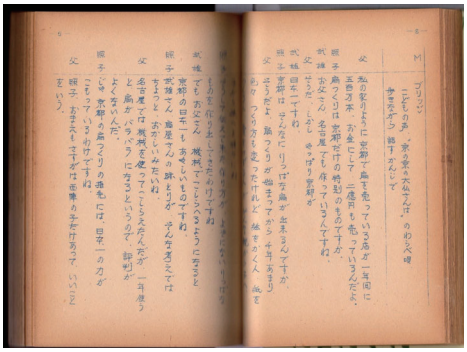
資料目録の一例

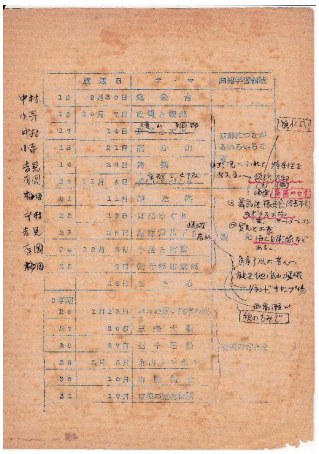
吉見敏夫氏旧蔵資料（古書市にてシルヴァン書房から一括入手）

整理用	番号	タイトル	作成者	作成年月日	内容	備考
19460125	95	しんせい　にっぽん　よい子のうた（代議士さんは民主主義	出雲路よしみず（作詞）・佐々木すぐる（作曲）	昭和21年1月25日（作詞）	星林社発行。二色一枚刷りで、楽譜の青刷り1枚を綴じ。	
1949	96	昭和二十三年末　少年警察の活動実績	京都警察局刑事部少年課	（昭和24年？）	京都市警察局の広報資料か。少年犯罪の傾向、生活実態などの詳細な統計を掲げる。	史料的価値高い。
19570111	48	こどものじかん　放送劇「幸平と天龍峡」	吉見敏夫(作)	1月11日		
19570524	65	子供の時間　笑え、ゆきちゃん	脚鼓部(作)	5月24日		作家？
1950	84	緑橋教育の歩み　上	京都市立緑橋小学校	1950年		
19510303	10	なつかしのアルバム　さらば母校よ	吉見敏夫(作ならびに演出)	26．3．3	学校生活を演劇風に紹介、シナリオか。	鉛筆で下書き。
1952	82	歳末組のウタ　流動資金計画表	京都市立緑橋小学校	昭和27年度		
195303	63	PTA劇脚本　ストーブの火はもえて	吉見敏夫(原作)	昭和28年3月		
19550906、19570702	1	NHK学校放送　吉見敏夫作品集	吉見敏夫	1955/9/6・1957/7/2	京都放送局発第2放送管中、学校放送京都府の時間のシリーズ。①「私たちの京都」新しい京都の地図」。②同第9回「琵琶湖の水」。③同「京都市の産業―古いもの―」。④「京風どびわ湖」。⑤同「のゆく京都」。⑥同第24回「伏見と淀川」。⑦同第29回「京都市の交通」。⑧同第6回「伏見の酒」。⑨同第12回「京風どびわ湖」の冒分を一括。	自家製本して表紙を手書き。
1955-1956	2	学校放送京都府の時間　30～31	久故博聴・松村英吉・有岡正明・西村孝一・吉見敏夫・大槻誠子・中村進三郎・小寺政太郎・藤野喜吉	昭和30―31年	京都放送局発第2放送管中、学校放送京都府の時間のシリーズ。①「私たちの京都第6回「舞鶴の港」。②同第7回「海べのくらし」。③同第8回「京都市の町と家」。④同「京都市の産業―古いもの―」。⑤同「京阪国道」。⑥同「京都府の産業」。⑦同「郷土の社会科―言葉の巻―録音機をかついで」。⑧同「私たちの言葉　よその家をたずねて」。⑨「同「おじいさんの言葉とぼくの言葉」。⑩同「はやりことば」。⑪同「一年生の時の作文」。	自家製本。背表紙にタイトルを手書き。吉見敏夫氏以外の作者の作品を集めたもの。④は1―③と重複。
19560201	87	もくば　第5号	京都児童文化研究会	昭和31年2月1日		
19560702	39	第7回　話し言葉と校内放送の演出及び効果講習会	京都市国語教育研究会長　松本清蔵・京都市放送教育研究会長　矢本守	昭和31年7月2日	講師はNHK京都放送局　田代晃二。	
19561201	88	もくば　第15号	京都児童文化研究会	昭和31年12月1日		
1956	3	学校放送京都府の時間　31	小寺政太郎・山本春信・中村進三郎・有岡正明・吉見敏夫	昭和31年	京都放送局発第2放送管中、学校放送京都府の時間のシリーズ。①第1回「町のくらし」。②「村のくらし」。③「海べのくらし」。④同第4回「青空市」。⑤「西陣織」。⑥「丹後ちゃめん」。⑦「昔の京都」。⑧「今の京都」。⑨同「おぐら池」。⑩「のゆく京都」。⑪「京風どびわ湖」。	背表紙にNHKのロゴと「京都放送局」のシールが貼ってある。吉見氏の筆跡部分のみ、鉛筆で加筆などが多数訂正されている。⑩⑪は1―④・⑤・⑥と重複。

⑪

ラジオ劇のシナリオ集と放送予定表





⑫

関係者の聴き取り調査

林弘子氏インタビュー（2013年8月21日）

林弘子氏（もと京都市立小学校長）は

1958年に本採用、京都市立の小学校に勤務。京都児童文化研究会に参加し、

吉見氏や久故博睦氏ら先輩教師とともに国語教材を作る。NHKラジオ劇・人形劇の運営実態について訊いた。

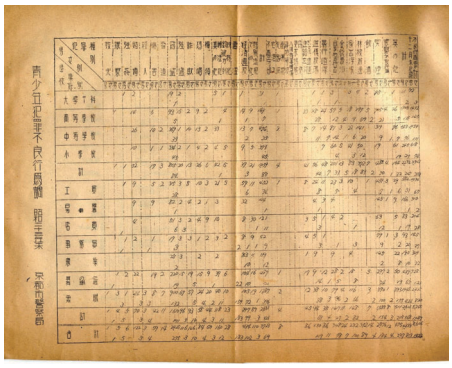
この番組の特色は、教諭が書いた脚本（京都の歴史や文化・現在の問題等）を、実際の小学4・5年生がNHKプロデュ―サーの指導の下で演じ、社会科の授業で聴いたこと。

13

京都児童文化研究会の会誌『もくば』

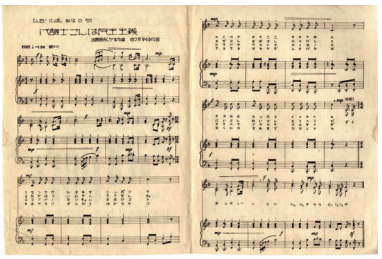
14

敗戦直後の京都の実態を示す資料①少年犯罪の統計



15

敗戦直後の京都の実態を示す資料②民主主義の歌



⑯

（3）教職員組合関係資料の調査と活用

- 京都における国民的歴史学運動の展開について2005年頃から調査を進め、その過程で京教組・奥丹教組の厖大な資料が未整理のまま組合の資料室に放置されていることを知る。京阪神の研究者とともに10年間かけて資料整理を進め、科研報告書に目録を掲載し、奥丹教組資料は京丹後市史編纂室へ移管・保全。
- 戦後京都の教育を巡る行政と組合との政治対立の影響等により、充分活用されぬまま眠る資料の多さ。「教育史」のみの研究対象とされ、地域史の基礎資料として読まれない。元教職員の高齢化・死去により、戦中・戦後京都地域の教育や生活の貴重な記憶が失われつつあること等、取り組むべき課題が多い。

⑰

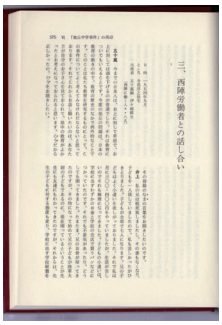
京教組・奥丹教組資料の調査

奥丹後教育会館の調査（2007年）

京教組旭丘資料　箱D

整理番号	文書番号	文書名	年代	作成者	宛先	内容	点数	備考
箱D	1	〈会議資料〉運動会資料　1950	（1950年）	未詳	未詳	運動会編成簿（1952年あり）、プログラム（1948年、1949年、表紙）、雲梯ピラ、など。	1	
箱D	2	〈会議資料〉運動会編成簿	（1953年10月11日	旭丘中学校生徒会	未詳		1	
箱D	3	〈会議資料〉★年表★戦後の世界と日本―六年の歩様―	（1951年）	未詳	未詳	本などの一部＆、1941年から1951年まで。	1	
箱D	4	〈会議資料〉京野高校で旭中出身者と対談（浪田・伊ヶ崎）	6月10日	未詳	未詳	出席者　平田鶴雄、福井敏、藤井舜之、大畑雅章、宮川武、手（と、伊ヶ崎、浪田）。	1	表題下に「旭丘史料　055」のラベルがあるも、6月10日とされて記されている。
箱D	5	〈新聞〉父母の新聞NO.2	（1955年）	京都婦文化部、京都子どもを守る会、京都婦人団体連合、木田編集	未詳	「やめてもらいたい　学校の寄付集め」。	1	
箱D	6	ビラ〈声明書	昭和29年5月12日	旭丘中学校教員一同	未詳	京都市教育委員会へ抗議。	1	
箱D	7-1	ハガキ〈旭丘中学校生徒会用〉ハガキ）	昭和29年12月31日	南宏昭雄	所立第四中学校生徒会一同様	1953年中の活動を褒めて激励。	1	以下箱D-1～8まで、京都婦の封筒袋に一括。
箱D	7-2	ハガキ〈（年賀状）〉	昭和29年1月1日	丸江美子	寺島洋之助様	中学校の改革へ応援。	1	
箱D	7-3	ハガキ〈（年賀状）〉	昭和29年1月1日	田中義松	旭丘中学校主任兼先生外職員諸一同様	年賀状。	1	
箱D	7-4	封書〈（寺島洋之助宛諸検封書）〉	（1954年）3月3日	伊竹裕子	寺島洋之助先生	礼状。	1	
箱D	7-5	〈会議資料〉〈会議のメモ〉	未詳	未詳	未詳	会議メモ。	1	3頁。
箱D	7-6	〈新聞〉人権民報　京都版第3号	1954年6月10日	日本国民医療会京都府支部	未詳	「月後文部大臣・松川の動き注視」「旭小・高・松小及び高・田辺ブロックの家庭訪問」「旭小・高・田辺ブロックの家庭訪問」「旭小・高・田辺ブロックの家庭訪問」「旭小・

「旭丘中学事件」(1953年)を違う角度から見る



・旭丘中学校の学級新聞、副読本の他、罷免教諭の上告時の裁判資料、教員側を支持する父兄・生徒グループと、「教育の正常化」を訴えた一部住民側それぞれの作成したビラや会議資料等、他所にはない資料を含む。
・「保守的教育政策」対「革新的教育運動」という単純な図式ではなく、旧鷹峯学区・旧待鳳学区の住民構成の差、守旧的なリーダー層と「進歩的父兄」(教員支持者)の対立等、京都の教育風土を考える上で重要な素材。
・生徒会会報『入道雲』には、若手教員と西陣織工場で働く労働者との座談会や、1945年8月15日に何をしていたかに関する生徒・教員のアンケート等、1950年代の住民の地域社会への視線や歴史意識などを読み取りうる記事が数多く、一種の地誌と評価できる。

19

成果と今後の展開

- 竹松家資料新聞データベースを用いた研究の展開
  ex　占領期京都のヤミ市分布、京都市電廃止への市民の反応、京都タワー建設に対するメディア間の相違、上賀茂地区と「さんやれ祭」の変容　他
  目録・画像データを完成し、デジタルアーカイブとして公開を目指す。
- 調査中の他の資料に関しても順次整理し、データベースを作成する。
  京都の教職員組合・教員・学校所蔵資料、京都市内の前近代梵音具資料、三品彰英氏旧蔵書・資料、戦中戦後における地域住民のライフヒストリー(戦争体験～高度経済成長期の変容)の聴き取り、友禅図案・経営関係資料　その他
- 研究が遅れていると言わざるを得ない「京都地域資料」の情報収集・調査・整理を進め、その成果を他の研究機関とも共有しつつ、地域の一般住民や学生、研究者、教育者等に広くフィードバックするしくみを構築していきたい。

20